

## ヴィエンチャンにおける華人墓

Graves in Vientiane Chinese Cemetery, Laos

加納 寛

Hiroshi KANO

愛知大学国際コミュニケーション学部

This paper surveys the graves in Vientiane Chinese Cemetery, and shows typology and brief chronology of the graves. Vientiane Chinese Cemetery, managed by a Chinese religious organization, is located approximately 7 km west of Vientiane city and adjacent to Wat Tay Airport. The graves in the cemetery can be classified into three types, Turtle-Shell Graves, Coffin-Shaped Graves and Chedi (Stupa)-Shaped Graves. Turtle-Shell Graves and Coffin-Shaped Graves suppose inhumation, whereas Chedi-Shaped Graves suppose cremation. The data shows the oldest graves in the cemetery, built in 1940s, were built as small-scale Turtle-Shell Graves and Chedi-Shaped Graves. In 1950s, Coffin-Shaped Graves appeared and gradually became the most popular grave type from 1960s. In 1990s, the size of Turtle-Shell Graves became larger.

## はじめに

東南アジア大陸部に位置し、中国・ベトナム・カンボジア・タイ・ミャンマーに囲まれた内陸国であるラオスには、海路からベトナム等を経由して中国南部の人々が入ってきた一方で、陸路からも盛んに中国の人々が入ってきている。ラオスにおける華人人口は、17万人で人口の3.2%を占めるとされ[原2008:91]、その首都であるヴィエンチャンも少なからぬ華人人口を擁している。

首都ヴィエンチャンの中華理事会理事長林振潮氏からの聴取によれば<sup>1)</sup>、現在ヴィエンチャンには6千人程度の華人が在住しており<sup>2)</sup>、陳姓が最も多く、次いで林姓が多いという。かつては広東や福建、客家の人々がほとんどで<sup>3)</sup>、1940年代後半頃には数万人の華人がヴィエンチャンにいたが、1975年を機に華人人口は大きく減少し、現在では雲南や四川からの移住者も多いという<sup>4)</sup>。

このような東南アジア大陸部における華人については、文化人類学や社会学等の側面から大いに研究が進められてきているが、彼らの墓についての専論は必ずしも多くない。しかし、墓は被葬者及び／あるいは築造者の死生観を如実に表現するものであり、当事者の文化的アイデンティティの表象として非常に重要である。墓は物質としてある程度の永続性を有し、儀礼研究に比して観察が容易であるという研究上の利点もある。筆者は科学研究費補助金によって東南アジア大陸部の華人墓地を踏査する機会をいただき、既にミャンマーのマングレーにおける雲南系華人墓に関して拙報告を発表しているが[加納2008]、本稿では2008年8月に踏査の機会を得たヴィエンチャンの華人墓について報告したい<sup>5)</sup>。

林振潮氏によれば、ヴィエンチャンにおける華人墓地は、大規模なものとして市街西方9km地点(ラック・カーオ)と、市街の逆方向10kmほどの地点の2か所に存在するとい

---

1) 2008年3月ヴィエンチャン中華理事会にて聴取。

2) 中華理事会に加入するにはラオスでの永住許可を得る必要があるため、ニュー・カマーの中国人はほとんど入会できていないという。そのため、ヴィエンチャン在住の華人人口は、実際にはもっと多いと考えられる。

3) 林振潮氏も潮州(広東)の出身である。

4) この研究ノートでは、墓誌銘に記された出身地の分析は行わないが、最も多く見受けられたのは広東出身者であった。とくに潮安(潮州)出身者が目立つ。広東出身者としては、澄海等の汕頭出身者も多く観察された。また、現在は広西チワン族自治区に属する防城の出身者も多く見られる。1980年代以降の墓では、紅河等の雲南出身者も多く観察される。その他、四川、湖北、福建、江蘇等の出身者が見られた。

5) なお、ラオスにおける墓の研究として、比留間はルワンパパーンのベトナム人墓地に関する詳細な調査を実施し、その成果を発表している[2010]。筆者もそれに隣接する華人墓地に関して概略的な踏査を実施したが、これについては稿を改めて紹介したい。

う。墓地は、中華理事会ではなく、永珍善堂という慈善団体が管理している。永珍善堂は、中華理事会とは別組織であるので、市街北方約2kmの地点に事務所と堂宇<sup>6)</sup>を置いている(図1参照)<sup>7)</sup>。しかし、実際には中華理事会と永珍善堂とは幹部が共通しており、ヴィエンチャンの華人組織として同一の方向性をもつように思われた。

今次調査では、永珍善堂の御協力を得て、市街西方ワット・タイ空港の北側に位置する華人墓地「華僑山莊」を観察する機会を得た(図1参照)。本稿は、その「華僑山莊」に見られる華人墓について紹介するものである。

## 1. 墓地の立地

「華僑山莊」は、首都ヴィエンチャンのワット・タイ空港の北側に隣接して立地している(北緯17度59分56秒、東経102度33分23秒付近)。中華理事会(北緯17度57分58秒、東経102度36分12秒付近)や永珍善堂(北緯17度59分6秒、東経102度36分24秒付近)が立地するチャオ・アヌ通りからは概ね6km西方に当たる。市街から西方に伸びる13号線に続くサムセータイ通りから北西方向に分岐するノーンドゥアン通りを5.5kmほど行き、空港の北西末端近くで南に折れる小道に入って300mほど行くと西側に華人墓地が広がっている。墓地の範囲は南北におよそ250m、東西におよそ400mで、周囲はおよそ1.2km、面積は約6.4ヘクタールである(図1参照)。なお、墓地の東南側には上座仏教寺院のワット・ウィエイトーンがある。

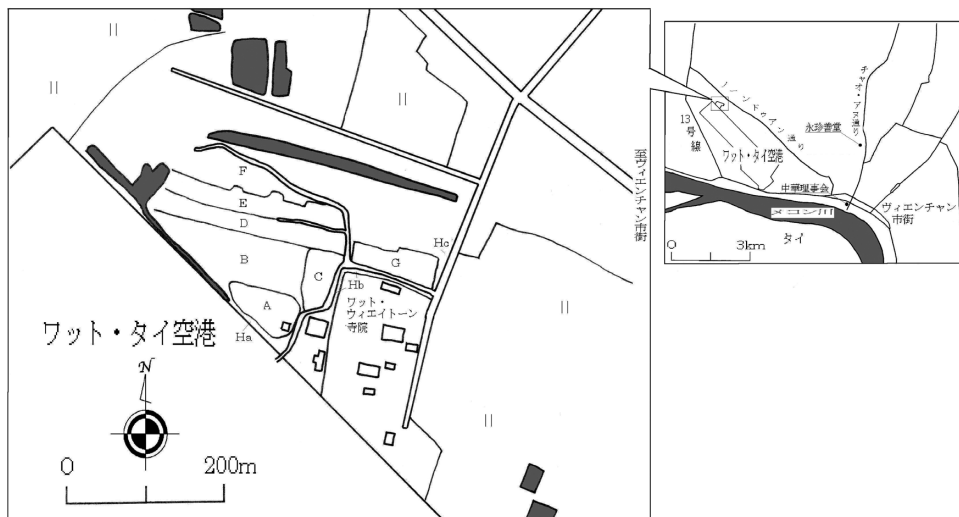


図1 ヴィエンチャン華僑山莊略図  
(Google Earth Pro によって取得した2010年2月12日の画像を  
トレースしたものを原図として使用し、加筆修正した)

墓地の門をくぐって100mほど西行すると、墓地内の道は南北に分岐する。分岐点から南に100mほどの場所に、弁事所、礼堂、福德神廟といった3棟の建築物が存在し、埋葬前の儀礼はここで実施される。最も大きい建築物が礼堂であり、西側を正面とした一辺およそ20mの正方形の平屋で、吹抜きになっている。その南側には弁事所が隣接している。礼堂の向かい側には北向きに福德神廟があり、その内部には「土地神位」が祀られている。墓地全体の中では、最も南に位置するこの3棟の建築物が立地する周辺が最も高く、北に向かってなだらかに傾斜している。墓は、仏塔型墓を除いて全てが北に正面を向けている(写真1参照)。

以下、墓の型式と変遷について、それぞれ観察していきたい。



写真1 ヴィエンチャン華僑山荘  
(北から南を望む。奥の左側に見える建築物は礼堂。  
奥の正面は福德神廟)

## 2. 墓の型式

「華僑山荘」に見られる華人墓は、その型式から、亀殻墓、箱型墓、仏塔型墓の3型式に大きく分類することが可能である(図2参照)。まずは各型式の特徴について紹介する。

### (1) 亀殻墓

亀殻墓は、墓碑の背後に亀の殻のような墳丘を有する墓である(写真2、図2参照)。この型式の墓を、周[1996]は「亀殻墓」、平敷[1989]は「墓亀型」と呼んでいる。平敷によれば、この型式は福建や広東において墓の範型であったとされ[1989:265-267]、福建・広東出身者の多い東南アジア華人の墓として一般に紹介されることの多い墓型式である<sup>8)</sup>。

6) 永珍善堂の堂宇は1971年に建立されている。

7) 中華理事会の事務所とは2kmばかり離れるが、チャオ・アヌ通りに面している中華理事会と同様にチャオ・アヌ通り近傍に立地している。



写真2 亀殻墓

「華僑山莊」では、長径4mほどのものから、長径が10mを超えるものまで、様々な規模の亀殻墓が観察できる。墓地全体を象徴するような「先僑万人公墓」もこの型式で建造されていることを考慮すると、この墓型式は「華僑山莊」における代表的なものとして認識されているように思われる。

墳丘の前面は墓碑を建てるために扇形に削り込まれ、削り込まれた部分はコンクリートや石材で覆われる。削り込まれた部分の中心には墓誌銘が刻まれる。一般に、墓誌銘には中央に被葬者名が刻まれ、右側に出身地が、左側に墓の建立年が記されていることが多い。墓誌銘の高さは70cmから120cm程度である。墓誌銘の周囲には、それを取り囲むように卵型の平面プランをもつ壁が、墳丘の傾斜に沿って配され、その前方開口部からは大きく腕を広げたように緩やかな曲線が扇状に広がって、1～2段の10cm程度の高さの段差を有する平面が墓誌銘の前庭のように展開している（写真2、図2参照）。なお、箱型墓よりも複雑な前庭構造を有するとはいえ、小規模の亀殻墓の墳丘をコンクリートで覆ったものは次の箱型墓の型式に非常に近くなり、分類上の注意が必要である。

## （2）箱型墓

箱型墓は、奥行3m、幅0.6～1m、高さ0.3～0.6m程度の直方体か、それに類する形の本体を有する墓である（写真1、図2参照）。コンクリートで外枠が造られており、上部には土が盛られているものもあれば、上部もコンクリートで覆われているものもある。脚部の正面に高さ0.6～1m程度のコンクリート板が設置され、そこに被葬者名等を刻んだ墓誌銘が取り付けられているものが一般的である（写真1、図2参照）。墓誌銘はほと

8) タイの華人墓を紹介しているチットラーも、この型式のみについて紹介している[ฉัตร 2541(1998)]。タイでは、この型式の墓を一般に「フォンスイ（風水）」と呼ぶ。東南アジアにおける大規模な華人墓地として知られるマラッカ（ムラカ）の「ブキット・チナ」の華人墓も、この型式のものである。

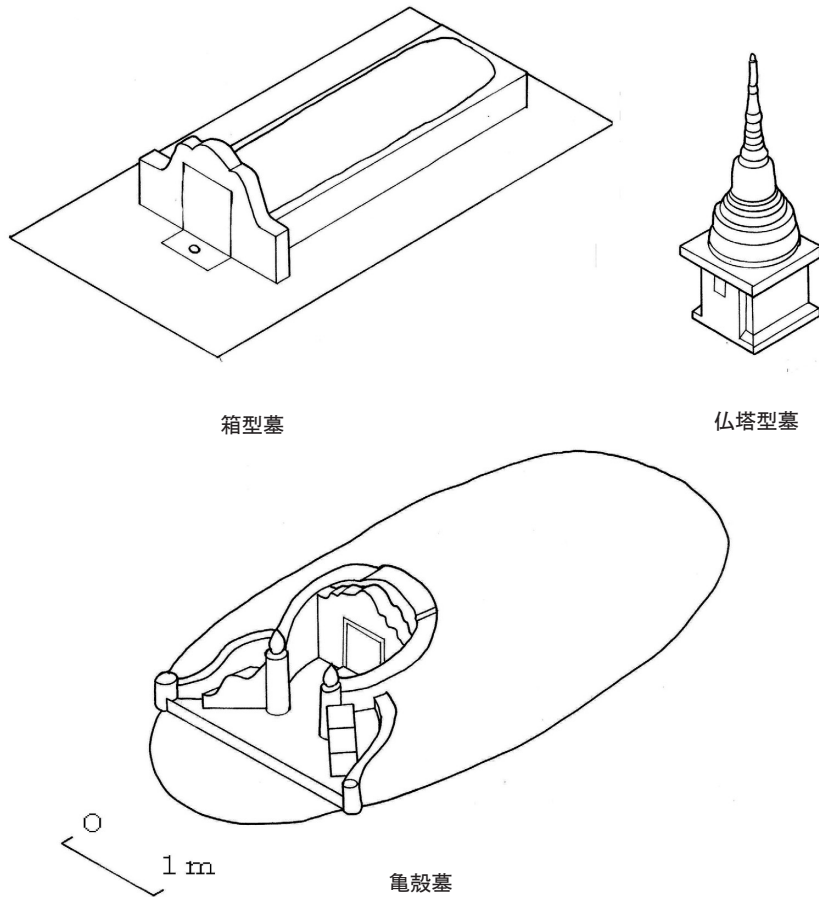


図2 華僑山荘内華人墓模式図  
(図は全て同一縮尺である)

んどが漢字で記されているが、ラオス語で書かれたものも数基見受けられた。墓誌銘の両脇に、亀殻墓に見られるような腕を付け前庭を設けるものもあるが、亀殻墓に比して簡素である。

数は少ないが、頭部上面に祠堂を設置してあるものもある(写真3)。この場合には、墓誌銘は脚部ではなく、祠堂の内部に刻まれることになる。また、脚部正面に高さ2m程度の豪華なファサードを有するものも観察され(写真4)、箱型墓には様々な型式上の変種がありえることが理解できる<sup>9)</sup>。

### (3) 仏塔型墓

仏塔型墓は、ラオス式仏塔を模した高さ2～3m程度の墓である(図2参照)。亀殻墓や



写真3 上部祠堂付箱型墓



写真4 大ファサード付箱型墓

箱型墓が土葬を前提とするのに対し、仏塔型墓は火葬が前提である点で他の2型式とは大きく性格を異にする。仏塔型墓は、タイでも多く観察することができる墓型式である[加納2009:314]。仏塔には、平面プランが方形のものと円形のものがある。いずれも基壇は方形である。また、基壇上に仏塔ではなく祠堂を設けたものもある。仏塔型墓の基壇前面や堂部全面には墓誌銘が取り付けられているが、漢字で記されているものもラオス語で記されたものも存在する。基壇前面の墓誌銘裏に遺骨を収納するものと、堂部に収納ものがある。

### 3. 墓地の構成と変遷

ヴィエンチャンの「華僑山荘」は、墓の並び方や種類から、便宜上8地区に分類することができる。本稿では、図1に示すように、A～H地区と呼称する。全体として、墓は空港を背にして概ね北向きに、整然と並んでいる。

#### (1) A地区

まず、墓地南部には、墳丘の長径が10mを超えるような比較的大規模な亀殻墓が10基ほど散在している。1950年代のものから1990年代のものまで築造年代は幅広い。この中には、1967年に建立された「先僑万人公墓」も存在する。

#### (2) B地区

1960年代から1990年代までの亀殻墓が、南北方向に6列で全体として約150基、整然と並んでいる。墳丘の長径は5～10m程度のものが多い。

#### (3) C地区

B地区の東側には、小規模な亀殻墓が約150基、1列あたり約14基、11列に並んでい

9) 加納が紹介しているマンダレーの雲南系華人墓の石廟型式も、この一変種として考えた方がよいのかもしれない[加納2008]。

る。C地区の亀殻墓は墳丘の長径4mほどのものであり、規模としては箱型墓と大差がない。1940年代から1960年代にかけてのものが多く。

(4) D地区

B地区とC地区の北側にあたる。箱型墓が約650基、西側には1列あたり約80基で6列に、東側には1列あたり約35基で5列に並ぶ。古いものには1960年代から1970年代にかけてのものが見られる。

(5) E地区

D地区の北側にあたり、1990年代以降の新しい亀殻墓が、約60基並ぶ。墳丘の長径は10m程度の大規模なものである。

(6) F地区

E地区のさらに北側にあたり、E地区のものより大規模な2000年代の亀殻墓が数基散在している。いずれも巨大で壮麗な前庭構造をもつ。

(7) G地区

墓地の門を入った小道の北側であり、D地区の東側にあたる。1980年代以降の箱型墓が約300基、1列あたり約50基で6列に並んでいる。

(8) H地区

墓地の外縁にあたり、空港沿い外縁(Ha)、ワット・ウィエトーン沿い外縁(Hb)、東側外縁(Hc)に3分できるが、どの部分も仏塔型墓が1列に並んでいる点で共通している。空港沿いには1960年代以降1970年代までのものを中心に約60基、ワット・ウィエトーン沿いには1940年代前半のものから2000年代までにかけて約70基、東側外縁には墓地に向かう小路に沿って1960年代から70年代のものを中心に21基が並ぶ。

表1 型式別・地区別主要年代表

墓型式	亀殻墓					箱型墓		仏塔型墓		
	C	A	B	E	F	D	G	Hb	Ha	Hc
概数	150	10	150	60	10	650	300	70	60	20
1940年代	○							○		
1950年代	○	○						○	○	
1960年代	○	○	○			○		○	○	○
1970年代	○	○	○			○		○	○	○
1980年代			○			○	○	○		
1990年代		○	○	○			○	○		
2000年代				○	○		○	○	○	○

\*数と年代については、概略を示すものであり、精査したものではない。



### (9) 墓の変遷

以上のように地区別に墓の築造年代を概観すると、今のところ次のような整理ができそうである(表1参照)<sup>10)</sup>。1940年代からこの墓地に墓が造成され始め、当初はC地区に小規模な亀殻墓とHb地区の仏塔型墓が建造されていったことが読み取れる。1950年代になると、墓地が西方に拡大されて、A地区、B地区に亀殻墓が、D地区に箱型墓が、またHa地区に仏塔型墓が設けられるようになった。1980年代には、D地区の箱型墓が飽和状態になり、箱型墓はG地区に設けられるようになっていった。亀殻墓は1990年代にE地区へと拡大し、より大型化・壮麗化の方向性をもつようになったと考えられる。

## 結び

以上、ヴィエンチャンの「華僑山荘」における華人墓を観察してきた。この墓地には、正確な数ではないが、380基程度の亀殻墓、950基程度の箱型墓、150基程度の仏塔型墓の3型式が混在していた。亀殻墓と箱型墓が土葬を前提としている一方で、仏塔型墓は火葬を前提としている。ミャンマーやタイの大都市においては、地積不足のため華人の土葬墓は都市部から郊外に移転されたり新規埋葬が中止されたりして、都市中心部においては火葬を前提とするパネル墓が中心となっているのに対して、ラオスにおいては多大な地積を要する亀殻墓が首都においても存続していることがわかった。墓地全体を象徴するような「先僑万人公墓」も、亀殻墓であった。ただし、ヴィエンチャンにおいて最も多かったのは、東南アジアの華人墓として従来よく紹介されてきた亀殻墓ではなく、箱型墓であった。このような箱型墓は、型式上様々な変種をもちえることも、「華僑山荘」の踏査で明らかになった。以前、ミャンマーのマングレーにおいて雲南系華人墓として紹介した「石廟」型式墓についても、このような箱式墓の変種として捉えることができるかもしれない。また、ヴィエンチャン華人墓地では、小仏塔に遺骨を納める仏塔型墓も観察することができた。

墓の変化については、ヴィエンチャンの「華僑山荘」においては次のような変遷があったことがうかがわれた。この墓地が使用され始めた1940年代には、小規模な亀殻墓と仏塔型墓が造成されたが、1950年代に入ると亀殻墓の一部が大規模化していった。1960年代には、小規模な墓としては箱型墓が一般化し始めた。また、亀殻墓は、1990年代に入って一層巨大化・壮麗化する方向性をもっていることがわかった。

今後の作業としては、これらの華人墓の諸型式が、東南アジア大陸部においてそれぞれ

---

10) もっとも、今回の報告はあくまで暫定的なものであり、より正確な結論を得るためには、墓碑等の悉皆調査が必要である。

どのような関係にあるのか、また、いずれかの年代や地域、あるいは出身地に特徴的なものであるのかを体系的に整理しながら、より多くの事例を収集していくことが必要である。中国における故地の墓型式についても資料を収集する必要がある。こうした作業によって、時系列的にも地域的にもある程度の広がりをもった墓型式の体系化が可能になり、彼らの文化的アイデンティティについての理解を深められると考える。

また、華人墓は、非常に多くの文字情報を含む墓碑銘が付随していることから、これらを集中的に収集していくことによって、華人の移動経路を中心としてかなり詳細な華人社会史を再構成することが可能であると考えられる。いずれそのような調査の実施についても考えていきたい。

付記：本稿の元となった調査は、科学研究費補助金B「東南アジア大陸部地方華人の地域間移動に関する実証的研究」（2006~2008年度、研究代表者：荒井茂夫三重大学教授、課題番号：18402030）による調査の一部である。調査にあたっては、ヴィエンチャン中華理事会の林振潮氏、永珍善堂に大いにお世話になった。感謝申し上げる次第である。

#### 参考文献

- ・原不二夫（2008）「華僑・華人」桃木至朗ほか編『新版・東南アジアを知る事典』平凡社
- ・平敷令治（1989）「台湾漢人社会の墓制」渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社
- ・比留間洋一（2010）「ラオス・ルアンパバーンのベトナム人：度重なる政変下におけるマイクロ・リージョンの創出と維持」『地域研究』10-1
- ・可児弘明、斯波義信、游仲勲編（2002）『華僑・華人事典』弘文堂
- ・加納寛（2008）「マンガレーにおける雲南系華人墓」『総合郷土研究所紀要』53
- ・加納寛（2009）「墓」日本タイ学会編『タイ事典』めこん
- ・斎藤忠（1978）『墳墓』近藤出版社
- ・周星（1996）「椅子墳と亀殻墓」『南島文化』18
- ・จิตรา กอนันท์เกียรติ (2541) ธรรมเนียมนี้คือคำพร เสง- เสง- ฮง- ชก อมรินทร์บุ๊คเซ็นเตอร์